特集・河川整備と流域管理

水土グランドデザインと水・緑・安全

細 見 寛*

1. 地域づくりは、地方から

平成8年度は、第9次治水事業5箇年計画を要望する年である。これからの河川と人との付き合い方を議論し、21世紀へ向けて、より適正な地域環境の構築を目指すため、色々な方に意見を聞いた。各地域毎に特色を生かして、要望を積み上げていこうということで、近畿地方は、地方建設局に河川懇談会を設置し、「水土グランドデザインとギャラクシープラン」という答申をいただくとともに、府県毎でも、懇談会を、近畿地方建設局と府県共同で開催し、各種の提言をいただいた。

こうした動きを基に、建設省河川審議会から、「21世紀の社会を展望した今後の河川整備の基本的方向について」の答申が6月28日に、建設大臣に出された。この方針に沿って、今後、我国の河川整備が進められていくことになる。

いずれにしても、今回の5カ年計画の策定にあたっては、情報をオープンにし、地域の意見を頂戴し、そして練り上げてきたビジョンが基になっており、その地域の主張にそって、今後の治水事業の展開が図られることになろう。

ここでは、そうした近畿地方の今後の河川ビジョンを中心に紹介していくこととする。

2. 近畿地方の次の5箇年コンセプトは、「水・緑・安全」

河川といった従来の河川区域の中の発想を止め、水循環系を全体に置いて、地域づくりを考えるという視点から、「水」とした。

砂防といった従来の土砂崩れや山体崩壊を防ぐという発想を進め、緑の保全育成を考えるという視点

から、「緑」とした。

「安全」は、生活の基本であるから、地域づくりで、忘れてはならないキーワードである。

多くの答申や提言から、近畿地方の第9次治水事

表1 近畿地方河川懇談会、府県河川懇談会等の答申、提言要旨一覧

近畿地方懇談会	
サブテーマ・ポイント	答申日
近畿地方の“水土” グランドデザインとギャラクシープラン ・河川文化を活かして近畿の風土を再構築していくために ・良質で高度な都市文明に応じた高度な防災対策を展開していくために ・水循環系のなかで健全な水環境がと共存していくために	平成 8 年 2 月16日

府県域河川懇談会		
区 分	サブテーマ・ポイント	提言日
福 井 県	「マイリバー・アクション・プラン」 ・「基本理念」人と川とのいい関係 ・人と川との共存型社会を構築し,「人と川とのいい関係」をめざす。	平成 8 年 6 月25日
滋 賀 県	「21世紀の淡海の川づくりをめざした提言」 ・いのち育む水の惑星地球号の未来に向けて, 時空を越え, 人と自然にやさしく, 清らかな流のある淡海の川づくり。	平成 8 年 3 月 1 日
京 都 府	「提言・京都の川と水」 —文化の継承と創造— ・基本理念 京都の川と水の文化の継承と創造	平成 8 年 7 月 4 日
大 阪 府	「次世代の大阪の川づくりに向けての提言」 ・大阪らしい川の役割とかわづくり ・人・川・自然がふれあう河川空間づくり ・人々の川への参加を促す仕掛けづくり ・脅威と恩恵をもたらす自然との共生の仕組みづくり	平成 8 年 3 月14日

* 近畿地方建設局
Yutaka HOSOMI

つづく

つづき

兵庫県	「21世紀のふるさと兵庫の川」をめざして ・川毎の特性と役割が大きく異なっていることを踏まえた川づくり。 ・水循環の保全・再生のための保水、地下水かん養等の機能の改善を図る。 ・豊かな感受性や美意識を持って、いい材料、いい工夫を用いることを心がけていく。	平成8年 5月15日
	「六甲山系グリーンベルト構想に関する提言」 —安全で魅力ある地域を目指して—	平成7年 12月25日
奈良県	「悠久のロマンあふれる川づくり」 ・川と暮らし「一人一人が行動する川づくり」 ・川の未来1「みんなで育むかわづくり」 ・川の未来2「川の未来を考えた河川環境整備」	平成8年 5月17日
和歌山県	「21世紀にむけた“きのくにの川や溪流づくり”」 ・安全で豊かな「きのくに」 ・豊かな自然との共存 ・水系文化圏の再構築と文化圏相互の交流 ・川や溪流の魅力ある水辺づくり ・「きのくに」の歴史・文化の川と溪流づくりを世界に発信	平成8年 8月7日

業5箇年計画のコンセプトを「水・緑・安全」とし、5つの目標を設定した。

それは、以下の通りである。

- 1・安全な生活の実現
- 2・水と緑の危機管理施策の展開

3・新しい水循環社会の実現

4・美しい水系環境の実現

5・水と緑に根ざした水と緑のネットワーク形成と交流連携の促進

3. 「安全な生活の実現」と

「水と緑の危機管理施策の展開」

「安全な生活の実現」が、急がれることは、論を待たない。30年から40年に1回発生する程度の雨に対して、地域を守ることすらままならないのが実態であり、とりもおさず治水安全度の向上が望まれる。

加えて、近畿地方は、阪神淡路大震災を経験し、未曾有の規模の大災害でも、被害をより少なくする対策や人命救助対策の必要性を痛感した。こうした災害に対して、現在、六甲山系グリーンベルト整備事業が進められている。これは、六甲山の開発を抑制し、緑を保全する砂防施設を整備することにより、山崩れを防ぎ、市民に安全な緑の六甲山をつくっていかうとするものである。

また、阪神地域の震災復興の一環として、水と緑豊かな潤いのある水辺を形成し、大地震時等の災害時には防災用水としての川水を供給源として活用できるようにするために、自流の乏しい阪神地域の諸河川へ、他水系から導水するという「阪神疏水構想」がある。兵庫県等各界の声、並びに、地域住民アンケートでは、この構想の実現が極めて強く望まれている。

さて、この六甲山系グリーンベルト事業や、阪神

図・阪神疏水構想のルート検討図

疏水構想は、いわば「21世紀型インフラ」と言える。近代都市の形成は、経済性、効率性が優先され、都市内の社会問題解決の一手法として、都市計画法が制定され、各種の都市計画施設が整備されてきた。しかしながら、従来の都市計画施設は、欧米に習い、ややもすれば生活の快適性や利便性を基本に置き、平面的に都市を捉える幾何学的な計画の基に成り立ってきた。アジアモンスーン地帯にあつて風水害多発地域、そして地震多発地帯での都市造りという点では、全くもって、災害に対する危機管理という視点が欠如しているのである。この面で、上述の2つの構想は、危機管理までを念頭に置いた、まちづくりの新しいインフラであるといえよう。

4. 「新しい水循環社会の実現」と 「美しい水系環境の実現」

平成8年度をもって、「琵琶湖総合開発計画」が終了する。考えてみれば、近畿地方の後世に残る戦後の大土木事業は、「高速道路」、「新幹線」、「琵琶湖総合開発事業」であり、琵琶湖総合開発は、近畿の現代を形作った大事業であった。（もちろん、「関西国際空港」、「明石大橋」、「関西文化学術研究都市」は、今後評価されていくことになるだろう。）しかしながら、平成六年度は、琵琶湖の水位が、マイナス123cmと過去最低を記録する大渇水を経験した。近畿地方は、10年に1度発生する渇水に対しても安定して取水できるように、水資源開発を実施しているのであり、その目標を踏まえ、新しい水循環社会を構築するため、水循環を適正化するダム等の建設や広域的な水融通を図り、これにより安定した水供給を目指すことが必要である。一方、下水道の進展にともなう、川の表流水が少なくなり、各地で豊かな水流の復活が叫ばれている。下水道処理水は、都市の中の貴重な水資源でもあり、エネルギー消費の少ないリサイクルが望まれる。こうした川などの表流水、下水道処理水等を、どのように流すのか、総合的なマスタープランが望まれるところである。

平成7年度、大和川は、水質の面で、全国ワースト1になった。「大和川清流ルネッサンス21」という、2000年までに、環境基準達成を目指した行動計画を策定しているが、この計画の着実な実行が必要である。また、琵琶湖・淀川水環境会議から、8月1日に、「琵琶湖・淀川を美しくかえる」提言が出された。3つの理念、5つの行動指針と目標、7つの総合的

表2 「琵琶湖・淀川を美しく変える」提言骨子

理念
1：琵琶湖・淀川の健全な水環境を基本とした新しい社会の創造
2：主体的行動とパートナーシップによる新しい社会の形成
3：将来ビジョンの共有と高度な技術による新しい水環境の創造
行動指針
1：対立から協調、そして協働へ
2：部分への対処から総合的な取り組みへ
3：開発・管理から総合的な保全・創造へ
4：行政主導から市民の参画へ
5：後追い対応から予見的アプローチへ
目標
1：次世代に引き継ぐ美しく豊かな湖と川の創造
2：心から安心して飲める水の実現
3：泳ぎ遊べる水の実現
4：ビワマスがおどり、イタセンパラのあそぶ湖と川の保全
5：悠久の歴史・文化を映し込む湖と川づくりの推進
総合的な水環境改善対策
1：健全な水環境系の保全と再生
2：環境負荷の少ないライフスタイルの実現
3：水環境改善のためのパートナーシップの構築
4：水環境改善対策
5：湖沼・河川の水辺環境の改善
6：研究・開発の推進
7：水文化の継承と創造

な水環境改善対策が唱われている。この提言に沿った対策の実現が望まれる。

5. 「水土に根ざした水と緑の ネットワーク形成と交流連携の促進」

「水土」とは、古語である。平成7年12月に国土庁から「国土グランドデザイン」が示され、そこで、新国土軸が示された。しかし、その新国土軸も、日本の東西方向の軸であった。近畿地方河川懇談会は、むしろ川の流域の視点を大切にする地域づくりを考える方がよいということで、南北方向の「水土軸」を提唱し、各界に大きな反響をもたらした。

地味豊かで、心満ちた21世紀の社会は、その地域の歴史・文化・風土・地理に馴染んだものであろう。「近代化＝スピード」の21世紀ではなく、自然のリズムの中で人間らしく、そして個人個人が幸せと思える21世紀をつくるためには、流域単位で、思考してみることが必要である。流域は、水の地上での循環単位であり、一番身近に自然のリズムを教えてくれるからだ。

そこで、5番目の目標は、その「水」循環とそして「土」に育まれる緑から得られる人知れない祝福

を、多く生み育て享受していくために、水と緑のネットワーク化を図り、そして、上下流や、都市、農山村の交流と連携を促進していこうということになった。

近畿地方では、九頭竜川流域で、「ドラゴンプロジェクト」が動いている。「ドラゴンリバー交流会」という NGO が発足し、どんぐりを植えたり、川の掃除をしたりと、美しい山水景と清らかな水を保全するための活動が、市民主導で動いている。行政側も、「ドラゴンサミット」を開催し、こうした活動を支援する宣言を出した。全国初のソフトプロジェクトである。健やかに成長していった欲しいものである。

もう一例、近畿発で全国で初めての例を紹介しておこう。「大滝ダム学べる建設ステーション」である。奈良県、和歌山県の小学生の社会学習の場に、ダム現場を開放したのである。教育委員会や学校の先生の指導を受け、「現場がまるごと教室」のコンセプトで、受け入れ整備をおこなった。「おおすぎの塔」と「豪雨体験」が非常な人気で、小学生だけでなく、多くの人の交流の場となっている。

6. 防災救命テクノコンペを実施

「水土グランドデザインとギャラクシープラン」では、21世紀にふさわしい以下の3つの施策が提案されている。

- 1：防災と水緑環境技術の次世代産業化を支援
- 2：高度情報通信システムの構築
- 3：水上交通の復活を研究

このうち、1については、「防災、水緑環境技術次世代産業化試験研究プロジェクト実行委員会」を、近畿地方建設局と近畿地方七府県、三政令市で、発足して取り組んでいる。まずは、知恵や技術を掘り起こそうと、「防災救命テクノコンペ」を実施している。平成9年2月には、そのコンペ結果の発表と、今後展開すべき施策が見えてくる予定である。自然災害に対する21世紀型の自助・互助システムが模索される中、防災救命の民生技術を育て、壊滅的被害と人的損傷の回避可能性を飛躍的に向上させようというプロジェクトであり、我国の経済フロンティアを開拓するとともに、国際貢献になるかもしれないと、産業界も相当な力の入れようとなっている。水緑環境技術に関しては、今後取り組んでいく予定である。

2については、すでに、淀川では、光ファイバー

ケーブルを敷設した。河川管理施設のビジュアル監視の時代に突入すると共に、高度なデータ収集体制を構築する段階に入っている。今後、GISの整備と共に、充実した情報加工や伝達が実現していくことになる。マルチメディア時代に対応して、各種のメディアに、河川情報を載せる時代が到来しており、インターネットでは、すでに近畿地方建設局はホームページを開いており、各種の情報公開に踏み切っている。また、神戸市の鹿の子台団地では、神戸ケーブルテレビのチャンネルに、河川情報を流そうという実験が計画されている。

3については、上海長江交易促進プロジェクトの調査検討が進むにつれ、物流としての淀川の水上交通がにわかに脚光をあびている。そもそも、淀川の三川合流地点は、日本の物流のへそであり、いまでも、山崎では、JR、新幹線、高速道路がひしめいている。その地点に今後さらに、京奈和自動車道、通称第二名神自動車道、京都縦貫自動車道等が、集中してくることから、そこに、外国との交易品をスムーズに集め、配送していくシステムの構築に、近畿地方の将来の浮沈が大きくかかってくるからだ。マルチモーダルの観点から、現在、複数の委員会で実現性の研究が進んでいる。

7. 終わりに

大きな時代の転換期である。河川、上水、工水、農水、下水と、地表の水脈は、それぞれの目的に応じて管理者が決められ、自らの目的にそった事業を展開してきた。

21世紀は、美しい水系環境を実現するための水量水質の問題の他に、新たに、都市の危機管理としての水流の問題、飢餓回避としての水資源確保の問題を解決しないといけない。

こうした問題を解決するためには、従来以上の総合行政の展開が必要になる。そして、その総合行政とは、従来型ではなく、市民の声を介在した形になっていくことだろう。市民と行政の関係は、昔からの地域文化に根ざしていることから、それは、ローカルティ豊かな行政展開になっていくことを予感させるものであり、別な見方をすれば、東京発の思考形態からの独立をも意味することになるだろう。

近畿地方は、琵琶湖総合開発をやり遂げたことで、もわかるように、みんなが一緒になって総合行政を展開してきた経験を持つ地域である。そのためには、

特別立法まで、行う実力がある。琵琶湖総合開発特別措置法もそうだし、大阪湾臨海地域開発整備法(通称ペイエリア法)もそうである。政府提出法案が叶わぬ場合は、議員立法でも、法律を作成するというたくましさが存在する。必ずや、21世紀の新しい水循環の構築に向けて、近畿地方は、こうした風土を活かし一丸となって取り組んでいかれることを祈願して、この論文を終わる。

なお、当論文に出てくる「水土グランドデザインとギャラクシープラン」については、情報を幅広くオープンにするために、大蔵省印刷局発行で本にし、政府刊行物サービスセンターでお買い求めいただけるようにしている。「琵琶湖を美しく変える一提言」も、出版されると聞いている。時代を敏感に反映したこれらの本をお読みいただければ、近畿地方の水にかかわる21世紀が感じ取れるだろう。

新刊図書

悠 久 の 京 の 川

理科教育と公害問題

著者 美簾 照子

発行 合同出版

A 5 判 230頁

定価 1,800円(税込・送料別)

産業優先、人間無視の高度経済成長政策がもたらした、破壊の爪跡は凄まじかった。人々はあらゆる種類の汚染物質を含んだ空気を吸い、有害物を含む汚れた水を飲み、添加物や水銀、カドミウムの入った汚染食品を食べ、そのうえ騒音や振動に苦しめられ続けていた。

こういう状況が公害という姿をとって日本列島全地域に広がり始め、ついには人間の「生活環境の破壊」にとどまらず、動物や微生物さえも棲息することのできない瀕死の列島へと追い込まれていくようになった。

このような状況は、千古の歴史と文化の中を流れてきた京の鴨川、近畿一円の「命の水瓶」である琵琶湖にも広がっていた。

本書は、私立家政学園高校(京都市)の「理化クラブ」の昭和36年より始まった鴨川や琵琶湖などの水質汚濁の実態調査に取り組んだ活動と、その27年間にわたる水質調査データをもとに編纂したものである。「郷土の環境記録史」の一端であると共に、個人のささやかな公害教育の実践の報告になればという思いでまとめたものである。

(まえがきより抜粋)

— 主 要 目 次 —

- 第1章 水質調査の動機
- 第2章 美しい川とは
- 第3章 名水の誕生
- 第4章 水質汚濁の判定法

- 第5章 水質測定とその分析結果
- 第6章 生徒たちが綴った測定日
- 第7章 円山川と琵琶湖の水質を調べて
- 第8章 水質環境基準への提言